1995年度　河合塾　夏期特別企画

あ・ら・か・る・と

温故知新

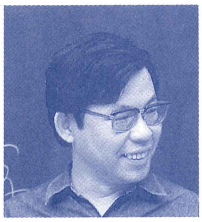
50年を形容することばとは――

参加無料

京都校	8月2日・3日・15日
大阪校	8月9日・17日・18日
大阪南校	7月29日・8月15日・16日・17日

内容紹介 日程・講師・講座

京　都　校



井上　五郎先生
（小論文・世界史）
8月2日(水)
13:20~14:50

戦争責任と戦後補償の諸相

今日の日本社会で大きな争点になっている戦争責任・戦後補償の問題を中心とした「戦争」をめぐるさまざまな議論を検討し、錯綜した問題を解きほぐしたいです。

山崎　瑛二先生
（古文）
8月3日(木)
13:20~14:50

学校で習った日本・世界史は本当に正しいのか？

日本古代史にとって切り離せないのが「任那日本府」である。四世紀後半朝鮮半島西南部に大和朝廷が軍隊を送り、その後200年にわたって支配したという。ところが朝鮮半島東南部にあった百済は同時代中国の遼西・遼東地域に軍隊を送ってその地を支配したという。しかし、このことは日本史はおろか、世界史でも取り上げられたことはない。なぜなのか？そもそも「任那日本府」も百済の「遼西支配」も歴史事実として認められるのか。歴史が歴史学者の「いま」から語られる以上、歴史学者自身の「いま」を戦後50周年の現在問いなおす必要があるだろう。

牧野　剛先生
（現代文）
8月15日(火)
17:00~18:30

若者の思想と行動の50年

敗戦50周年にあたり、時代状況と若者の思想と行動の50年を考えてみようと思う。その時エポックとして60年安保闘争、70年全共闘運動、連合赤軍内ゲバ、爆弾闘争、80年新人類オタク、90年オウム等の意味を考えたいと思います。

大　阪　校

倉田　修先生
（古文）
8月9日(水)
13:20~14:50

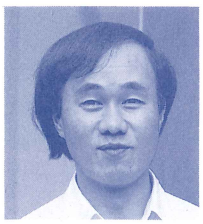
現代敬語の悪意 ～我々に贖罪意識は可能なのか～

日本に住まいする私たちが日常に使っている言語は現代日本語である。この現代日本語には、文法的な破綻や矛盾は全くないのであろうか。もしもそれらしきことがあるのならば、私たちの考察の道具は常に不良品であり、私たちの世界観は常に誤解と狂気へと傾斜する危険を抱えることになる。そもそも「戦後50年決議」文も現代日本語文であるらしい。ダイジョウブナンダロウカ？現代の敬語法を例に最近の予感を告白したくなりました。

牧野　剛先生
（現代文）
8月17日(木)
17:00~18:30

若者の思想と行動の50年

敗戦50周年にあたり、時代状況と若者の思想と行動の50年を考えてみようと思う。その時エポックとして60年安保闘争、70年全共闘運動、連合赤軍内ゲバ、爆弾闘争、80年新人類オタク、90年オウム等の意味を考えたいと思います。



古川　彩二先生
（倫政）
8月18日(金)
17:00~18:30

リベラリズムを考える

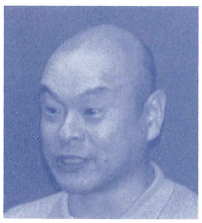
最近、リベラリズム（自由主義）が何かと脚光を浴びている。社会主義の崩壊とリベラル・デモクラシーの勝利、共同体論や保守主義からの批判、etc.。しかし、自明であるかのように語られているリベラリズムとはいったい何なのか？戦後50年を迎えた今、西洋の近代で生まれ、戦後はわれわれ日本人の基本的価値ともなったこのリベラリズムの意義や問題点について、ブルセラ、ヘア・ヌード、尊厳死など今日的な話題を交えながら、考えてみたい。

大阪南校

辻本　茂正先生
（地理）
7月29日(土)
10:50~12:20

歴史と出会う旅—アジア

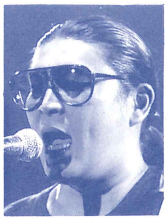
モルッカ諸島。16世紀、ヨーロッパ列強は金より高価な香料を手に入れるため、このちっぽけな島々を血眼になって探した。大航海時代の幕開けの要因。だが、この島を訪れた僕は、思いがけずもう一つの歴史に出会った。50余年前、この島に日本軍が駐留していたのだ。よそ者の僕を迎えてくれた親切な老人は、僕が日本人だとわかると、笑顔でこういった。「バカヤロー」。やがて老人は、日本軍が老人の村で何をしたのかを語りはじめた。（当日はスライドを交え、旅の苦さと楽しさについて話したい）



牧野　剛先生
（現代文）
8月16日(水)
17:00~18:30

若者の思想と行動の50年

敗戦50周年にあたり、時代状況と若者の思想と行動の50年を考えてみようと思う。その時エポックとして60年安保闘争、70年全共闘運動、連合赤軍内ゲバ、爆弾闘争、80年新人類オタク、90年オウム等の意味を考えたいと思います。



平田 匠・趙 博先生
（現代文）（英語）
8月15日(火)
17:30~19:00

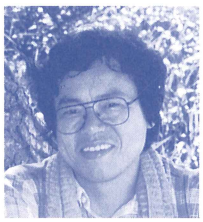
夢であいましょう

あの日
うす昏いそらをみて
つい
口をついてでた
そんなメロディ
を　うたいたい

音楽に
かかわるということ
人間
に
かかわるということ。
そんなこんな
を　うたいたい

※プロに挑戦アマといった図式ではとらえられません。
※「日韓民族音楽の夕」という趣とは異なります。
※二人が喧嘩つばやいというのはテマです。

※ギターの懐深とピアノの問絶がやさしく呼応します。
※二人が「むかし」情緒をしていたというのはテマではないようです。



金　貞義先生
（世界史）
8月17日(木)
10:50~12:20

越境される日本人—「国際化」って何?

今現在約129万人の「外国人」が日本に住みつき、日々の生活を営んでいる。すなわち約100人に1人がいわゆる「外国人」として暮らしている。しかし、日本には現在より、多くの「外国人」が住んでいた時代があった。戦後50年という節目を迎える中で、朝鮮と日本の過去と現在の関係を通じて、「国際化」とは一体何なのかを語ってみたい。

1945年8月、広島・長崎への原爆投下。1950年の朝鮮戦争勃発。私が生まれたのは1947年だけれど、子どもの頃から原爆や戦争のことはよく聞かされていたように思う。そして1954年の第五福竜丸事件（アメリカのビキニ環礁での水爆実験で「死の灰」をあびた）と、水着の「ビキニ」の由来、東宝映画「ゴジラ」の封切りが実は同じ局面の別表現であったことがわかったのは大学にはいった頃のことだった。大学での同級生を通して「韓国」に目が向いたのもその頃だった。そして今、1995年、何を発見し、何を創り出そうとしているのだろうか？1945年から50年が経過したけれど、この50年を形容する言葉は何だろうか？<オンコ・チシン>は過去にその原点を求めるだけではない。拠って立つべき原点はまだ創られていないのかもしれない。やっと模索の途についたのかもしれない。是非共同の討論に参集してほしい。　（八箇　亮仁）

河合塾

オンコ・チシン特別講演会 ―東アジア・日本・ベルリンをつなぐ線―

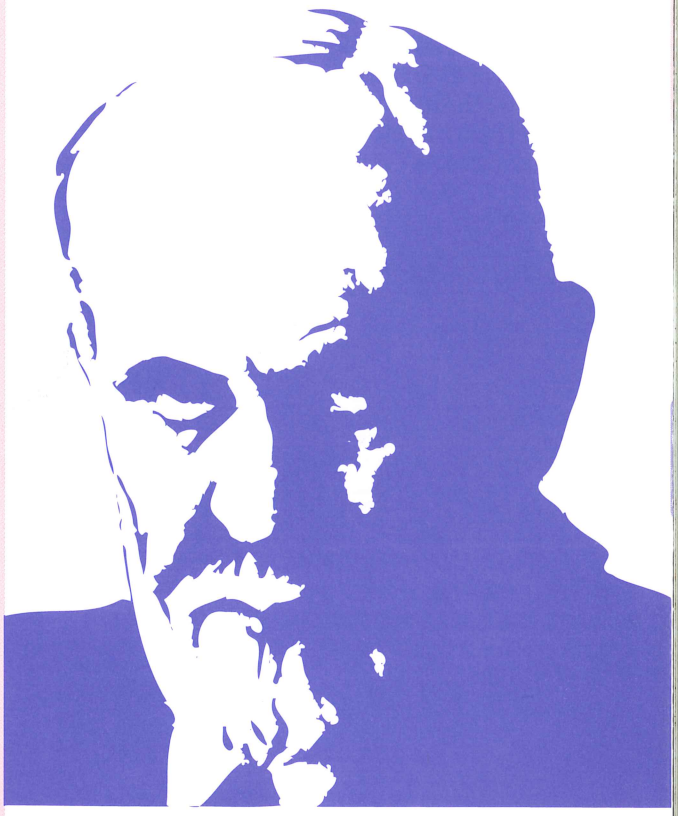
フロイトの時代診断

～精神分析は文化と暴力をどう考えるか～

この二、三年日本から伝わってくる話はあまりにも不可解で不気味なことばかりである。一体なぜ人間はこれほど奇怪なまでに不合理でありうるのか。あるいはそもそも人間が合理的だなどと考えること自体が問題なのか。いずれにせよ現実は既成のイデオロギーや理論でとらえられないことの方が多い。私の専門は哲学と精神医学の中間領域のようなところを行き来しているが、今日ほどこうした「研究」が人間の営む現実に対して何を語ることができるのかを試されている時期はないように思えてならない。

私は現在ベルリンに住んでいるが、この国は戦後五十年経ってもいまだに過去の亡霊に悩まされ続けている。もちろん「ナチ」という亡霊にである。つまりそれほどこの亡霊の犯した罪は大きいとともに、その根も深いのである。あの組織された狂気の暴力は一体どこから来るものなのか。今でも多くの人がその問いに向かって挑戦しているが、答えが出ているわけではない。この狂気の犠牲となった一人、精神分析学の創設者フロイトはこう述べている。「私の考えでは、人類の宿命的課題は、人間の攻撃および自己破壊欲動による共同生活の妨害を文化の発展によって抑えうるか、またそれがどの程度までできるかというところにある。この点で、現代という時代こそ特に興味ある時代であろう。今や人類は、自然力の助けを借りて容易に最後の一人まで殺し合うことができる。現代人の焦燥、不幸、不安の大部分は、我々がこのことを知っていることから生じている。」

精神分析は言うまでもなく精神医学の一分野だが、そうした観点から戦争や暴力はどのようにとらえられるのか、また文化やセックスなどとどういう関係にあるのか、そういう問題をフロイトのテクストを読みながら諸君と一緒に考えてみたいと思っている。



小林敏明先生

1948年　岐阜県に生まれる。
1974年　名古屋大学大学院文学研究科修士課程修了。
河合塾現代文講師として、授業・講演会などで力をおおいにふるいながら、その一方で北山修氏らとフロイトについての共同研究をつづける。
その間の論考は『精神病理からみる現代思想』―講談社現代新書にわかりやすくまとめられている。現在、ベルリン自由大学宗教学研究所（ドイツ）。著作に『<ことなり>の現象学』―弘文堂、『別冊宝島　現代思想入門』（共著）の他、大学受験問題集としては河合出版『現代文論述』がある。

日程　8月11日(金) 17:30～19:00

会場　河合塾　大阪校

京都校
〒604 京都市中京区三条通東洞院東入ル菱屋町41-2
TEL.(075)252-0581(代)
<交通>
●地下鉄御池駅下車徒歩2分
●阪急烏丸駅下車徒歩7分
●京阪三条駅下車徒歩12分

大阪校
〒531 大阪市北区豊崎5-8-4
TEL.(06)372-3581(代)
<交通>
●地下鉄御堂筋線中津駅下車スグ
●阪急中津駅下車徒歩5分
●阪急梅田駅下車徒歩7分

大阪南校
〒543 大阪市天王寺区上汐3-1-11
TEL.(06)774-2581(代)
<交通>
●地下鉄谷町線谷町九丁目駅下車徒歩2分
●地下鉄千日前線谷町九丁目駅下車徒歩2分
●近鉄上本町駅下車徒歩2分

'95河合塾文化講演会シリーズ 第7回「左右激突討論会」

戦後50年を獄中から問いかける

恒例になりました、河合塾「左右激突討論会」もおかげさまで今年で７年目を迎えました。

毎年、ユニークなゲストをお迎えし、その都度さまざまな波紋を呼び起こし、一予備校だけにとどまらない広がりと影響力を示してきました。

ことに昨年、左右の論客に加え、漫画家の小林よしのり氏をお迎えした折には、関西の浪人、高校生、大学生諸君の圧倒的なパワーに刺激されて、氏はその著、「ゴーマニズム宣言第７巻」にて、その模様を克明に描写され、その後「オウム真理教」教団との死闘へと突入された経緯があり、この討論会の外延の勢いにいまさらながら驚いている次第です。

例年、さまざまな分野で活躍しておられる人士をお迎えして忌憚のない意見を提出していただくに加え、左翼右翼の両陣営それぞれの、存在をかけた論戦をまじえつつ、学生からの意見、質問をおりこんで、まれに見る白熱を呈しております。

今年は戦後50年にあたるということで、各地でさまざまなイベントが行われており、そのマンネリズムに加え、この時代にもはや、左翼、右翼といった仕分けすらナンセンスではないのか、したがって「左右」がどのあたりで「激突」するのか、といった疑問すら出てきております。

まさにそのとおりであります。「左」「右」の大きな分かれ目であった、共産主義をめぐるたたかいも、天皇制をめぐる論議も、もはや日本人にとって切実なものとなりえず、その意味で古典的な「左翼」「右翼」は瓦解したと言えるでしょう。つまりそれぞれが、「思想」という「意匠」では勝負できなくなっており、したがって、個々の成員の人間味、あるいは人格といったものが、再びクローズアップしてきた、言わば、戦後50年にして、日本が人間個人を機軸に考える、「ルネサンス」を迎えたのではないか、と楽観的に考えることもできるのです。

「激突」は、そこから生じる火花から、何物かが生まれることを、私たちはきわめて楽観的に期待するために、あえて学生の前にしつらえたステージで行なおうとするもので、そこにこそ、形骸化した「左」と「右」の古びた概念を持ち出す意義もあるのです。

「左」は何を、「右」は何を持ってきてくれるのでしょう。

知花昌一氏は、沖縄読谷村にて、ソフトボール大会の折に壇上にて「日章旗＝日の丸」を焼き捨てる闘争に単身決起し、何と「器物破損罪」で起訴された方です。この微罪で起訴する国家権力の挙を見るにつけ、この国が、何を恐れ、何を守ろうとしているかが、はからずも露呈されました。そして、沖縄とは何か、沖縄の心とは何かを改めて私たちに突きつける事件でもありました。

木村三浩氏は、右翼陣営の誇る若き論客の一人で、数々の武装闘争に参加され、自主憲法論を掲げるかたわら、先の湾岸戦争の折には一貫してイラクを支持、また北朝鮮にも渡航を果たすなどグローバルな視点をもつナショナリストです。

さらに今年は、第三の論客として安部譲二氏をお招きしようと考えています。氏の直情的な、自らの存在をまるごとかけた表現者としての有り様は、常に私たちに刺激を与え、生き方を示唆し、そして立ちのぼるロマンのようなものをかがせてさえくれます。

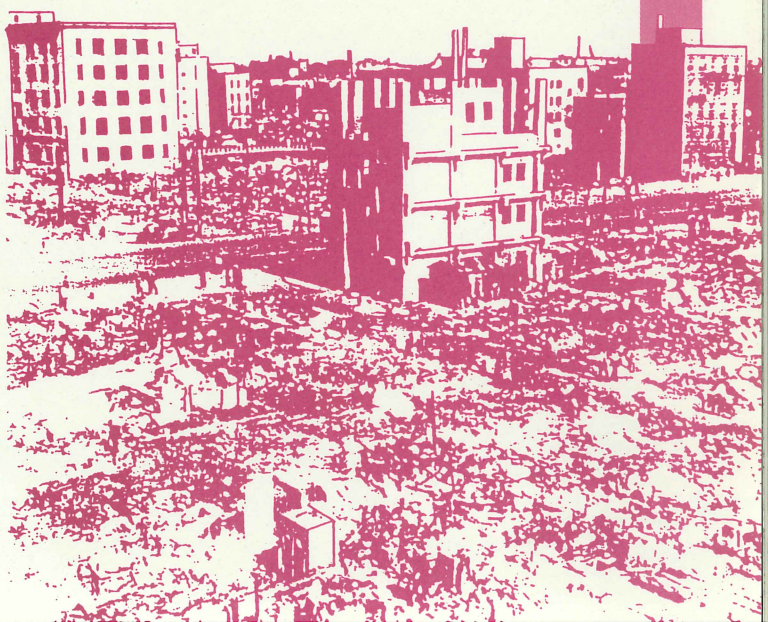
期せずして、司会者を含めた参加者は全員、獄中経験者です。かつてのレギュラーの論客で、今年からオブザーバーに回っていただく塩見、鈴木の両氏も、名だたる「反権力」の領袖であり、とうぜん映えある獄中経験者であります(塩見氏に至っては獄中20年)。

戦後50年の光と影を自ら体現してきた彼らの視座から逆照射した日本の戦後50年は、いかなるものでありましょう。

私たちは、さきの阪神大震災においてあまたの犠牲を払うことを通じて、都市文明のもろさを否応なしに知らされたのも、また宗教のかぐわしさとも、思想の厳しくも豊饒な世界とも無縁な「オウム」なる忌まわしい集団に席巻されたのも、皮肉にもこの50年目という節目の、今年でした。

この慚愧を踏まえ、私たちは、この50年が、日本という巨大なシステムにとってどれほどのものだったのかを注視しておく必要があります。したがって私たちが討論というひとときの激越な時間を共有するとすれば、そこには参加ゲストと学生たちとの世代を超えた偽らざる「共鳴」が存在しなくてはなりません。準備は万端でしょうか。この討論会は確実に「歴史」を動かしております。そして参加者は確実にその渦に巻き込まれる宿命にあります。そして「歴史」である以上、私たちは「勝利者」でなくてはなりません。

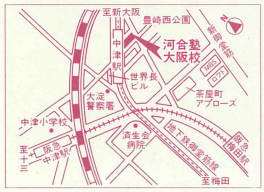
文責：河合塾英語科講師　松原好之



パネラー：知花　昌一氏(沖縄読谷村「日の丸焼き捨て闘争」被告)
木村　三浩氏(一水会「統一義勇軍」元議長)
安部　譲二氏(作家)

オブザーバー：塩見　孝也氏(元「赤軍派」議長、評論家)
鈴木　邦男氏(一水会代表、河合塾講師)

司　　会：松原　好之(河合塾講師)



<交通>●地下鉄御堂筋線中津駅１番出口左スグ
●阪急電車中津駅より徒歩５分
●阪急電車梅田駅北口より徒歩７分

日時：'95年10月1日(日)
PM 1:00 開演

場所：河合塾大阪校
601教室

参加無料

※当日は、大変混雑が予想されますので、全進ビル１Ｆにて午前10時より整理券を配布いたします。

'95おおさかコリア映画祭

元気印映画人宣言

―日韓映画交流の最前線から―

韓国のトップ俳優　在日の映画プロデューサー

アン・ソンギ、イ・ボンウ両氏を迎えて

만다라 **曼陀羅**

'81ベルリン国際映画祭審査員特別賞受賞

안녕하세요 하나님

神さまこんにちは

アン・ソンギ
安聖基
(1952年生)
韓国映画界を代表するスーパースター。今秋公開予定の小栗康平監督「眠る男」で、韓国人俳優として初めて日本映画の主役を演じる。

イ・ボンウ
李鳳宇
(1960年生)
映画配給会社シネ・カノン代表。韓国映画「風の丘を越えて」を配給。また、昨年日本映画界の話題をさらった崔洋一監督「月はどっちに出ている」を制作。

イ・ヨンイル
李英一
(1931年生)
韓国を代表する映画評論家。月刊「映画芸術」主幹。「韓国映画入門」(凱風社 日本語版)など多数の著書、論文がある。

日時　**9月23日(土)**
午後1時▸午後6時

プログラム
■第1部（13：00―16：50）
映画上映
1.「曼陀羅」(監督：イム・グォンテク/主演：アン・ソンギ)
2.「神さまこんにちは」(監督：ペ・チャンホ/主演：アン・ソンギ)
■第2部（17：00―18：00）
ディスカッション　―日韓映画交流の〈現在〉―
出演：アン・ソンギ/イ・ボンウ/イ・ヨンイル

会場
森ノ宮ピロティホール
〒540大阪市中央区森ノ宮中央1-17-5
TEL 06・944・1151
■JR大阪：環状線「森ノ宮」駅下車すぐ
■地下鉄：中央線「森ノ宮」駅下車2号出口

■入場料 ￥500　■主催・河合文化教育研究所　■協力・アジア映画社　■お問い合せ(映画祭事務局) TEL 06-774-3458

'95おおさかコリア映画祭

●元気印映画人宣言●

〈ひと〉と〈ひと〉が国境(ボーダー)を越えて軽やかにゆきかい、そのしきいが年々低くなってきているのはとてもうれしい。それがどこからやってきたものであったとしても、「いいものはいい！」と共感できるしなやかな好奇心も忘れたくはない。そんなことを思いながら、「戦後50年」のことし、加速する日韓映画交流の〈いま〉を生きる〈ひとびと〉とともに、未来のほうへとそれぞれの道を元気に走りだしたい。

曼陀羅

雲を追い、流れのままに僧侶ふたり放浪(さすらい)の旅

イム・グォンテク監督の「曼陀羅」は、旅する二人が主人公であることで、あまりにも明らかに正統派のロードムービーである。もちろん主演のアン・ソンギ演じる僧、法雲は悟りを求めて修業を続ける以上、座禅や読経や師との問答といった、寺院での日常が映されるのは当然だが、あくまでも映画の中心は、法雲とチョン・ムソン演じる破戒僧、知山の二人が放浪するところにある。「移動」が主題であるからこそ、冒頭近く、バスのなかで知山が法雲と初めて出会うシーンが、この映画の中でもっとも美しさを孕(はら)んだものとなる。半島とはいえ島国とは違う大陸の広さを感じさせる早春の風景の中に、二人の乗るバスが検問で止められる。知山は身分証明書も僧侶証ももっていないために兵士に降車を命じられる。法的には戦争状態にある国の緊張と、一枚の紙切れが証明する社会制度の保証にいかほどの意味があるのかという知山の問いかけの交錯する秀逸な場面だ。結局知山は、法雲の口添えと兵士の要求通り実際に経を読んでみせることで放免される。「同じ所に三日といられない性分」の知山は、本能を遠ざけ禁じるのではなく、没入することで煩悩を超えることができると考えるが、結局はニヒリズムに捕えられ、それを克服するためにさらに肉体を酷使することを繰り返す。酒を飲み、女を抱き、娼婦に愛され、選挙に出る同門の僧に毒づき、「糞で出来た仏でも信じるか。仏は自分の中にいる。おまえが仏になるのだ。」と田舎の寺の仏像の開眼供養で参会者を狼狽させ、病人の世話や死人の弔いをして、最後は野垂れ死んで

しまう。恋人を捨て、大学を止め、戒律を固守する知性派の法雲とは好対照である。肉体と精神のあいだのキャッチボールが、二人の人間の形をとって語り合っているのだ。死んだ知山を小屋に運び、淡々と数珠を懸けそのまま小屋に火を懸けて荼毘(だび)にふす法雲は、煩悩を昇華した意識の一つの可能性に見える。最後にチョン・イルソンの入魂のカメラワークで撮られた韓国の風景は、シネスコの広がりを生かしきってひどく美しい。

森野　久徳（河合塾講師）

神さまこんにちは

常世(とこよ)に生きる人は〈神〉

「障害者」であるピョンテ(安　聖基)の朝は「自力で起き上がる」ことから始まる。その日、小学校三年生の遠足で行くはずだった新羅九百年の古都〈キョンジュ：慶州〉へと彼は旅立つ。何故彼がいきなり慶州へ行くのか、映画を見るものにはわからない。最後まで分からない。ただ、その遠足の朝まで彼が「健常者」だったことが後に語られるだけだ。「変な奴だ」と馬鹿にされながらもピョンテはひたすら慶州を目指す。父に貰った絵の具をひっさげ、チョムソンデ（世界最古の天文台といわれている）から見える星を描くというのだ。半身

不随で言語障害を持つピョンテ――安　聖基の演技は迫真で、スクリーンのこちら側にいる我々は、思わずゴクリと生唾を飲み込むほど緊張してしまう。と同時に、すぐに「この映画はコメディーなのだ」ということも分かってくる。いや、Human Comedyと言った方がいいだろうか。ピョンテは飄々と闊達に旅を続ける。周囲の〈差別的視線〉などどうでもよいのだ。やがて、自称「有名詩人」のハン・ミヌ、そして臨月の妊婦チュンジャが道中で一緒になり、無賃乗車・無銭飲食…様々な苦難を経てピョンテとチュンジャは慶州に辿り着く。「障害者・売れない詩人・臨月の妊婦（しかも彼女はコテコテの慶尚道訛りだ）」――この取り合わせは一体何だろう？考えただけでもシュール。日常我々が「無視」しがちな人々がスクリーン狭しと走り回り・転げ回り・泣き・笑う。ペーソスと痛快さのオンパレードが続き、そして最後のシーンで二種類の子供たちが登場する。この「子供」の解説はやめておこう。ひょっとするとこの映画の鍵はこの子供たちかもしれないな、と私には思えた。（皆さん、楽しみにしていてね！）今までは、遠く手のとどかなかったものに出会える――この当たり前の人間の所業を「神さまこんにちは」と表現したのなら、上手すぎる喩えだなぁ。安　聖基見事だ！

趙　博（河合塾講師）

森ノ宮ピロティホール

〒540大阪市中央区森ノ宮中央1-17-5
TEL 06 - 944 -1151
■JR大阪：環状線「森ノ宮」駅下車すぐ
■地下鉄：中央線「森ノ宮」駅2号出口右手後ろすぐ